

十勝川千代田分流堰魚道検討委員会NEWS【第2号】

第2回 十勝川千代田分流堰魚道検討委員会が開催されました。



千代田新水路イメージ図

帯広開発建設部では、千代田分流堰設置に伴い新設する魚道設計にあたり「十勝川千代田分流堰魚道検討委員会」を設置し、技術的検討、モニタリング計画の検討を行い、提言をいただくこととしています。

その第2回目の検討委員会が平成13年12月10日に帯広市内の寿御苑で開催されました。

第2回検討委員会では、第1回検討委員会で各委員からご指摘があった事項、台風15号(9月)による出水後の新水路の状況の報告を受けるとともに、分流堰横の魚道計画等についての事務局説明に対して、活発な議論が交わされました。



第2回 十勝川千代田分流堰魚道検討委員会
(寿御苑：帯広市)

十勝川千代田分流堰魚道検討委員会名簿

平成13年12月10日現在

区分	氏名	所属
委員長	藤田 睦博	北海道大学大学院工学研究科教授
委員	板垣 博	十勝管内漁業協同組合長会会長
"	井上 聡	社団法人北海道栽培漁業振興公社常勤技術顧問
"	太田 昇	帯広NPO28 サロン専務理事
"	小嶋 孝	社団法人十勝釧路管内さけます増殖事業協会会長
"	鈴木 淳志	東京農業大学生物産業学部生物生産学科助教授
"	中村 禧夫	十勝川改修工事対策協議会会長
"	藤巻 裕蔵	帯広畜産大学畜産学部畜産環境科学科教授
"	藤本 長章	十勝エコロジーパーク推進協議会副会長
"	眞山 紘	独立行政法人さけ・ます資源管理センター調査研究課室長

(敬称略、五十音順)

第2回 十勝川千代田分流堰魚道検討委員会では次のような意見が出されました。

我々業界としては、基本的に十勝川の環境を守り、サケの恒久的な資源の維持管理が最大課題である。また、5月の稚魚放流期、9月の遡上時期に新水路等へのサケの迷入や上流の公園化構想による水質汚濁等について対策を望む。

道内における3タイプの魚道（パーチカルスロット、アイスハーバー、改良階段式）での遡上効果は。魚道の横に遡上が観察出来る窓を設けることは可能か。

魚道に入る手前の川底の状態は関係ないのか。

新水路や魚道で生物が上流まであがれ、繋がるのがまず大事である。次にそれを観察出来て、子供たちがカヌーや水遊びが出来ることが大事だ。その可能性や自然の力を借りた魚道内の浄化について検討してほしい。

堰を操作した時、本川と新水路に流れる水の配分は決まっているのか。

改良型階段式の場合は中、大型魚ならのぼると思うが、小型魚が遡上している調査結果が無い。その点は大丈夫なのか。

大河津分水洗堰のイメージがわからないので、ビデオで撮影してほしい。

目保呂ダムではハゼのような小魚を対象と思うが、事後調査等の情報はるか。

水理条件の資料がない状態で、改良階段式を選定するのはやや問題がある。

各タイプの魚道での水理条件と魚の行動をあわせて考える必要がある。

タイプが決まったら、実際に流速分布などを測定するのか。

切り欠きの深い部分と上の方の流速分布は違い、その辺りが小さい魚はのぼれるかの境目になると思う。本川と新水路の合流点付近の流速が毎秒1cmであれば、水が停滞するため、水温が上昇し水が腐ったりヘドロ化しないか。

バック区間の水深はどの程度か。

水温、水質の問題を詰めることは出来るのか。

北海道の場合、エゾホトケは水温が25以上、ザリガニの仲間等でも20以上の水温が長期間続くと死ぬ可能性は高くなると思う。

大体1日の水温の変化が5~6、大きい時で7~8位あり、定期的にフラッシュ出来ないか。

伏流水が出ていれば違うが、夏場、木が無いところでは水温が上がり、魚は死んでしまうので、ネットを張るなど日陰を作る配慮を検討して欲しい。

サケの小型化は、人工ふ化の影響ではないのか。また、堰堤より上流に遡上させて、人工産卵させることは可能か。

漁業者としては将来、人工産卵だけを考えているのか。

魚道には距離の問題と水の流れがあり、階段方式に最初たくさんの水を入れると入り口が狭いのでオーバーフローするが、万遍なく水は流れるのか。

具体的に改良型の隔壁の間隔や勾配など、併せてこのタイプの実績も調べる。また、下流域の水質の問題も検討のこと。

9月の出水時に新水路が完成していたらどのようになっていたか。

人工ふ化放流でサケが小型化したというのは誤解である。北太平洋において密度従属により成長抑制が起きたことが原因と世界的に認識されている。

十勝の場合、湧水のある場所や上流の水路により、資源は保護されている。小さな川でも残していくなど、上流域を含めた環境保全が重要な点である。

海の栄養分を山に返すという、エネルギーの循環を考えれば、全て堰堤でサケを捕るのではなく、少しは

上げなければならない。

種を守るためには上流に上げることも、今十勝川でも考えておく必要がある。

支川ごとに漁業資源をつくる川、釣りの川、全く手を加えない遺伝子を保存する川など、最低支流位に分けた管理が将来的には必要である。

今 後 の 予 定

第3回目の魚道検討委員会は、平成14年3月を予定しております。

なお、委員会は公開です。どなたでも傍聴していただくことができます。

お問い合わせ先：国土交通省 北海道開発局 帯広開発建設部 治水課

TEL 0155-24-4121 FAX 0155-27-2377